

## 文學博士松村武雄著「神話學原論」に對する授賞審査要旨

文學博士松村武雄著「神話學原論」上下二冊は、神話に關して、著者が長期にわたつてなした神話研究を總合してできたもので、諸の學說についてその異同や長短を批判しつゝ、その結果著者の斷案を下し、それで神話學の體系を樹立している。而してその研究には諸民族の神話から實例をとり、學說の取捨にも事實にもとづいた觀察を施し、考慮をめぐらし、何れの問題についても學說と事實との参照をつくしつゝ、人文發達の一時期を畫する產物たる神話とそれに關聯する事象との真相を明にせんとしたもの。かくして著者は神話研究の大綱を示すと共に、その細目についても理論を整えてゐる。神話に關する學說や蒐集や、又此に關聯ある土俗誌旅行記歴史などについて、著者が一々之をあさつて研究の材料としたことも亦嘆稱すべきものがある。その結果、著者が筋途を立てた研究は、まことに廣汎で周密な神話學の綱目を作り上げて、その書名にそむかぬ實を收め、眞に神話學の大成とも稱すべきものである。

先ず第一章には、神話の定義について六類をあげてその異同關係を明にし、著者の總合定義を下し、次で神話と傳説や民話との關係を論じ、而して神話研究の大綱を示してゐる。

第二章神話起原論では、從來の諸學說を檢討してから、超自然の存在を動かそうとする態度、知ろうとする態度、描こうとする態度の三面から、神話發生の様相を考え、又三様相の關聯や錯綜あるをこまかに論じている。次で第三章神話發生の心理には、何れの民族も或る時期には神話を有することを明にし、神話の發生を想像に歸する從來の學說の缺陷を論じ、その發生は複雑であり、物の見方は共生共感の感じに始まり、それを人格的に見る樣態に従つて發

生ずるとして、類似學說の異同を明にし、此と共に神話發生の階段時期についても、諸說を批判して取捨判斷を下している。

かくて第四章には、他類の説話との異同を明にして、神話の特性を叙し、超自然性、人格化、共生、宗教、文化能力、説明、不合理、主觀的史實、類同、民族發生の十性質を擧げて神話の特色を述べている。此等の諸目について著者が分類の仕方には多少の交叉又は重複があると認められるが、著者の論述は甚だ詳しく、何れも諸の學說を批判して異同をたゞし、その間に取捨を施して、或は補い、或は正して、間々獨得の論議をも示している。特に神話に發達や變遷のあることに注意して本末前後などを論じ、又神話に對する高等文化の人の偏見誤見を指摘したごとき、神話研究者の中に頭角をぬくものがある。

第五章には、對象の別によつて自然神話と人文神話とを分ち、その他、様相（表現と意圖）、機能（聖性と俗性）、發達、話根、主題に應じて神話を類別し、而して各種類に應じて、内容や發生時期の差別などをとりあげて、諸說を批判し、多くは綜合判斷を下している。此章の題目は發生と心理とについて記した所が多い。

第六章では、神話の表現形式を論じ、先ず一人稱、現在、韻律、古風、謎語等と共に、對句、誇張、折返し、きまり文句、特殊の數などを擧げてゐる。

第七章では、神話内容の構成を論じ、その現實に基くことから、構成の諸法則と全體の組立、即ち話根や形態の範疇を述べてゐる。

第八章では、神話の發展變化について、環境、團體の共同意識、個人の意識、傳承の改變、異族文化との接觸を擧

け、第九章では、獨立發生と撒布傳播について、それを推定すべき法則や様式の法則を明にする。此等諸目に互つて諸の學説を批判して取捨を決し、又その細目についてもあらゆる方面の事情を分析して觀察周到なるものがある。

右で神話學の構造を盡し、その内容を詳論した後、第十章と第十一章とは神話學の歴史を叙する。古代から現代まで神話に關する諸の學説をつらねて、その發達變遷の跡を尋ね、特に現世紀に入つてから諸方面の學説を叙すること詳細なるものがある。此は順序として過去の追跡となつてゐるが、著者の神話學研究は此等諸學説の檢討から出たものであり、先に記した諸論點と密接に關聯し、著者の批判態度の中に收められているものであらう。特に今まで何れの人もこれだけ綱目を整えた神話學史を編して學説の筋途をとつてきたものないことを思えば、此の學史のみでも著者の功績を認めざるを得ない。

かくて最後に神話研究について、資料、比較、解釋について、こまごまの注意事項を擧げて全體を結んでゐる。

右に述べたように、著者の態度は博渉と批判と綜合とにあり、古今東西の材料により又學説を檢討して論述をすゝめ、周到で又明瞭に綱目を盡している。但し右神話學史には東洋の方面を入れていないのは、學説といふほどのものがない爲であるが、材料としては總てを入れ、又典籍の外に繪畫彫刻で神話を表したものを擧げて論點を説明している。而してその材料としては數多の典籍を利用して批判を加へていることも、亦著者が努力の尋常ならざるを示す。但し著者は周到細密を期する爲にか、行文に紆餘曲折が多く、語に類似又新奇のもの少なからず、又叙説に重複反復もかなりある爲に、讀過を困難にする點あるはむしろ遺憾とすべきであるが、著者が研究の實質内容にはすこぶる貴重なものがある。